# 論文の内容の要旨

論文題目　　幕末の社会変革と文芸

—菊池・大橋家の文人たちの歩みを追って—

氏名　　佐藤　温

本論文では、幕末に文人を輩出し、また当時の時局とも深い関わりを持った菊池・大橋家の人々に光を当て、その文芸への取り組みと社会との関わりを、変革期にあった社会の動向と絡めながら論じる。それによって、幕末において文人を志向することが彼らにもたらしたもの、そして文人という存在が同時期の社会において果たした役割を明らかにすることを目標とする。

菊池・大橋家の人々の主な顔ぶれは、文化年間に下野国宇都宮から江戸へ進出して古着商から一代で大成功を収めた、商家佐野屋の初代当主大橋淡雅、その実子で二代目当主の菊池教中、淡雅の娘で教中の姉に当たる大橋巻子、そしてその婿養子となった儒家の大橋訥庵という面々である。同家の人々は、学問や詩文書画といった諸芸に堪能な「文人」であったのみならず、幕末の動乱期を生き抜く方策を模索する中で、自身にとっての文芸の意義を考え、それぞれ本来の職業ないし志向を保持する上で必須の要素として文芸に取り組んでいったという点において注目される。

序論「幕末の「文人」の姿と菊池・大橋家の人々」では、このような菊池・大橋家の人々の横顔に触れつつ、近世日本の文人について論じた先行研究を概観する。一般に、幕末の文人は大衆化が進んだと言われ、結果として世俗的な傾向を強めたという否定的な評価が為されることがある一方、人々が文芸の場に盛んに集うことで身分の枠を超えた交遊がもたらされたという社会的意義が取り上げられる場合もある。それらを踏まえながら、本論文では幕末に人々が文人として諸芸に携わること、結社を作って集うこと、そして文芸によって表現を発信することが同時期の社会に与えた影響について、菊池・大橋家の人々を通して考える。

第一部「「文人」大橋淡雅の生きた幕末」で取り上げる大橋淡雅は、宇都宮で古着商佐野屋を営む菊地家に養子入りした後に江戸に分家開店（ただし、姓は大橋を名乗ったと言われる）し、商家佐野屋を大店へと急成長させるが、その傍らで文芸に熱心に取り組んでいた。第一章「富商大橋淡雅の文事と時局」では、淡雅という一商人の文事と経世への眼差しとの関わりを論じる。淡雅は渡辺崋山や立原杏所など諸階層の文人たちと書画鑑定サークルを結成したが、蛮社の獄で崋山が逮捕されると、その面々は救出活動の一部隊を結成するという意外な行動を見せる。このことは、文雅のサークルの中で日頃から時局に関わる情報や認識が共有されていたことを想像させる。

また、このサークルは同時に営利的な書画鑑定家集団としての側面も持っており、第二章「幕末の文人サークルと書画市場」で見るように、弘化 3 年（1846）にはその一員である書画商安西雲煙が幕府御用の鑑定業者である古筆家より特権侵害によって訴えられるに至る。背景には、このサークルが書画市場において新興鑑定家集団として急速に評価を高める状況があったと見られる。

淡雅がこの世を去ったのは嘉永 6 年（1853）5 月、ペリーの来航を直後に控えた幕末社会の動乱前夜とも言うべき時期であった。続く第二部「菊池教中の文人意識と『澹如詩稿』」では、26 歳で二代目当主の重責を担うこととなる淡雅の実子菊池教中（号、澹如）の生涯と文事を、特にその詩集との関わりにおいて取り上げる。

第一章「「文人」になることの意味―菊池教中『澹如詩稿』をめぐって―」では、教中が刊行した詩集『澹如詩稿』を通して、詩に描かれる理想の文人の生活を現実世界に実現しようとする教中の姿を明らかにする。同詩集には多くの田園詩風の作が見られるが、これは当時教中が佐野屋の経営改革の一環として開発を手掛けていた宇都宮の新田地域の実景を髣髴させるものであり、教中はこの田園での暮らしを自ら理想とする文人の生活へと意識的に重ね合わせていたと見られる。

第二章「詩人の夢見た理想郷―菊池教中の経世意識と『澹如詩稿』―」では、さらに教中の文人としての意識と時局との繋がりを考える。かの新田は元来経営の安定に資する目的で開発が企図されたが、教中はそこに政情不安から引き起こされる内乱や対外戦争を避けて佐野屋一統が集団移住するための自治村を建設しようとする。このことは、先に見た教中の文人の閑居への憧れの延長線上に、晴耕雨読の文人生活を営みつつ一統の暮らす村を率いる擬似領主的な領導意識までもが控えていたことをうかがわせる。

こうした教中の危機意識は、やがて義兄訥庵とともに攘夷運動に関与するまでに先鋭化するのだが、第三部「大橋訥庵の攘夷運動と文芸」では訥庵の攘夷家としての言動に注目する。訥庵は江戸の兵学者清水赤城のもとに生まれた儒者で、淡雅の娘巻子の婿として大橋家に迎えられるが、朱子学者の立場から西洋の接近や西洋文化の流入に強い警戒心を示し、主著『闢邪小言』をはじめとした攘夷の言説を以て知られた。

第一章「「攘夷家」大橋訥庵像の形成過程」では、訥庵が戦前期に勤王の志士として顕彰された一方で、戦後の研究では強硬な攘夷論者、あるいは自己矛盾を抱えた時局活動家というイメージのもとに論じられていることを取り上げ、これらの評価によって、訥庵の攘夷家としての行動の根拠がその個人的資質へと帰結してしまう可能性を指摘した。この問題へ切り込む端緒として、続く第二章「文人「閑居」の戦略性―大橋訥庵の小梅移居の背景と目的―」では、訥庵による「文人」としての自己表象を取り上げる。訥庵は安政 3

年（1856）に日本橋村松町から江戸郊外の向島小梅へと居を移すが、閑居への隠棲と銘打ちながらも面会日を引札で広く告知するなど、この転居には営利的な性質が強く見られた。当時の訥庵は攘夷言説の発信を献策や出版を通して画策するも果たせぬ状況下にあり、ここには不遇の時を経た儒者が自ら野に下って在野の逸人となるというストーリーが周到に演出されていた可能性が想像される。

また、第三章「幕末の志士が読む南宋の興亡―大橋訥庵「陳龍川文鈔序」を中心に―」では、訥庵の書物メディアを通した攘夷論の発信を和刻本漢籍との関わりで論じる。訥庵は南宋の主戦論者として知られた陳亮（号龍川）の文集『陳龍川文鈔』の和刻本の校閲に携わり序文を認めているが、その中で陳亮を金への徹底抗戦を訴え続けた攘夷の英雄として賞賛し、現今の日本が外虜から自国を守る道は陳亮の文に充溢した「気」を体得することによって開かれると主張する。ここからは、攘夷の先人の文章に義気を求め、味読することによって自らの気概を振起するという幕末の志士の読書の形を、訥庵が意識していたことがうかがえる。

こうして、訥庵は攘夷家としての声望を高めながら教中とともに時局的活動に携わるようになるが、終局は文久 2 年（1862）に突然訪れる。南町奉行黒川盛泰は、同年 1 月に訥庵および訥庵の息子（婿養子）陶庵を、そして 2 月には教中を相次いで逮捕し、訥庵と教中はおよそ半年に渡る獄中生活を強いられる（陶庵は早期に宇都宮藩邸に預けとなる）。その主な容疑は、同年 1 月 15 日に実行された坂下門外の変の計画への関与をはじめとした攘夷実行策の画策であった。その後、同年 7 月初旬に訥庵が、また下旬に教中がそれぞれ釈放されるものの、いずれも直後に病死するという最期を辿っている。

その中で、第四部「大橋巻子『夢路の日記』に描かれた訥庵・教中の幽囚期」で取り上げるように、訥庵の妻、教中の姉にあたる大橋巻子は家族が逮捕されて悲哀に沈む日々を『夢路の日記』と題した歌物語として著した。第一章「志士の妻の哀傷―『夢路の日記』の主題をめぐって―」では、まずこの物語が日記文学としての虚構性のもとに事実を再構成していることを明らかにする。

例えば、巻子は『夢路の日記』において自身を自宅で孤独に夫たちの帰還を待ち続ける存在として描くが、実際には訥庵・教中の救出活動にも携わっていた自らの様子は一切描いていない。また、本来は巻子が獄中の無事を願って詠んだと見られる和歌が、物語では王室への祈りや勤王の精神へと重なり合う文脈に据えられた例も見られる。こうした創作は、勤王の志士としての訥庵と教中の事績を顕彰しつつ、遺された家族の悲しみを綴った物語として構成しようとする巻子の意図を反映していると見られる。

その一方で、当時江戸の自宅で訥庵らの帰還を待っていた巻子の実際の様子は、巻子が宇都宮に住む母菊池民子へと送っていた月平均十通近くに及ぶ書簡から見えてくる。第二章「夢路をたどる日々の裏側―書簡が語る大橋巻子の文久二年―」では、この書簡が獄中の状況をはじめとした内部情報を伝達していることに着目し、同時期の巻子が多額の工作資金と広い人的ネットワークによって行われていた救出活動に主導的な立場で携わっていたことを明らかにする。

そして、第三章「『夢路の日記』の成立と伝播」では、これまで未解明であった同書の成立から流布へと至る過程を取り上げる。現存する『夢路の日記』の諸写本を検討すると、同書は一件の終局とほぼ同時期に成立して流布し始めたことがわかり、ここには物語を積

極的に同時代の人々に向けて発信しようとする巻子の姿勢を看取することができる。

以上のように、菊池・大橋家の人々は詩文や書画といった文芸に積極的に取り組み、また文人としての生き方や精神性を理想視する観念を有していたのみならず、文人という立場から社会との接点を持ち、文人であることを自身のアイデンティティと結びつけて考えていた。終論「菊池・大橋家の人々にとっての文芸の意味」では、そこから幕末の人々にとって文芸に親しむことが、混沌とした社会情勢の中で自らの進むべき方向を見極め、そして時には自ら社会へと働きかけていく上でも有益なものであったことを指摘する。